

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

【注意事項】

- 1、【問題一】と【問題二】の二題とも必ず解答すること。
- 2、解答はすべて「解答用紙」に記入すること。

【問題一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかには誰もいない。ただ、所々丹塗の剥けた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や掾烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

この「羅生門」の出だしで下人が孤独に雨やみを待っている場所が羅生門であることを示すためには、ある程度の羅生門の全景と下人が両方見える位置まで視点の位置が遠景化する必要がある。あまりに、下人に近づけば、下人の居る位置が羅生門であることを示せないからだ。

次の「広い門の下」という描写からも、巨大な門を遠景から描写していることが伺われるのだが、次の文章の「蟋蟀」や「円柱」の部分的に剥落した「丹塗り」を描写するには、視点位置が一気に対象に近づく必要がある。

ところが、次の、雨止みする人物が他に誰も居ないことを示す「市女傘」や「掾烏帽子」といった描写は、明らかに上方から見下ろす視点を有している。こうした視点の移動は、まさに近代文学の特徴であり、特に写真や映画といったテクノロジーの進歩は、こうした視点位置や描写に対して常に大きな影響を与えている。

こうした描写から何を讀むべきかは、ケースバイケースだが、たとえば、ここでわざわざ拡大された「蟋蟀」は後で時間経過を示す伏線として利用されているし、丹塗りの「赤」と蟋蟀の「黒」（この時代のきりぎりすはコオロギ）とのコントラストがこの物語全体の基調となっていることを思えば、遠景→接景→遠景となっていることの効果は大きい。

その代りまた鴉がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴉尾のまわりを暗きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。



Wikipedia: Miniature Model of Rajomon.jpg をもとに作成。
(https://ja.m.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Miniature_Model_of_Rajomon.jpg)

置から見上げないと成立しない。

つまり、これは下人の視点から見える景色を想定したシーンなのである。こうした描写している視線を有する人物を視点人物と呼ぶ。この語り手は、下人の視点を借用して世界を眺めているというわけだ。ただし、「視点」という言い方は、映像のみを提供するという誤解を生じさせやすいことには注意が必要だ。語り手は実際には、映像だけではなく、音、臭い、触覚など多くの情報を読者に提供している。

② この「鴉」が集まって来るシーンは、当時羅生門が死体置き場になってしまっていることの伏線として機能するわけだが、「鴉尾」の周りを鴉が飛ぶという描写は、実は上図のような位

「小論文」 国語国文学科

受験番号					
氏名					

人間に焦点化する場合、その人物の行動のみを描写する「外的焦点化」と、その心情までを描写する「内的焦点化」がある。「羅生門」の場合、物語中に下人の心情はしつかり描かれており、内的に焦点化していると言える。しかし、老婆の心情は一切描かれておらず、下人から見た老婆の様子が描かれるのみである。つまり、老婆には外的にしか焦点化されていないことになる。

と言うことは、老婆の姿とは、下人越しに見た様子であるのだから、その見え方に下人の心情が影響するのはむしろ当然であり、視点人物である下人がすべてを客観的に見る立場にあるわけではない（むしろ、すべてを客観的に見る立場とは、かなりリアリティに欠ける姿ではないだろうか）。

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。まぶたの赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖った喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わって来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬘にしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり、鬘のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

この老婆は、当初「猿」のようだと描かれていたが、引用部では徐々に「肉食鳥」「鴉」「鬘」と変化してゆく。この過程は、下人にとって恐れ畏怖する対象であった老婆が徐々に自分の意思ですべてをコントロールすることが可能な対象と認識されてゆくのと対応している。つまり、下人にとっての対象の見え方は、下人の対象に対する考え方と無関係ではないのである。

このような、見え方がそれを見ている人間の感情の影響下にあり必ずしもフラット（客観的）ではないという着眼点は大切で、それは当然ながら不可視な語り手の描写（＝「潜在化した語り手」）にだって現れる。つまり、語り手は常に何かしらの価値観を有して世界を眺めている。

（足田雅昭『文学理論入門』による）

問一

傍線部①について、どのような「効果」かを本文に即して説明しなさい。

問二

傍線部②について、誰のどのような「価値観」が現れているか。「このような、見え方が」ではじまる最後の段落を参照して、あなたの考えを書きなさい。

「小論文」 国語国文学科

受験番号	
氏名	

私は数年前に、今は亡くなられた、橋岡久太郎先生の演じられた「娘捨」を見て、なんともいえない感動を受けたことがあります。

「娘捨」という曲は、信州の娘捨山の古い伝説、つまり「檀山節考」のもとになっている話を素材にして、創り上げられた能で、あらずじは、有名な更科の月を見ようと、娘捨山にやって来た旅人が、夜になるのを待っていると、一人の女性が来たので、昔の娘捨の旧跡を尋ねると、女は、この木高い桂の木蔭が、昔老女の捨てられた所ですと教えたのち、自分がその捨てられた老女であることを仄めかして、夕闇の木かげに消え失せます。夜がふけると果たして、照り渡る名月の下に、白衣の老女が現われて、月に関係した伝説を語り、月の美しさをたたえる一方、現世への執心、昔の秋を取りもどし得ない淋しさを歌いながら、美しい舞を舞って、明方旅人の帰って行くあとに、一人淋しく取り残される。

以上のようなストーリーで、山上に唯一人捨ておかれた老女、それはもはや人間世界の俗情から超越して、月と同化したごとく浄化された美しい存在なのです。それでもなお、華やかな古の人間世界への執着を捨て切れず、淋しさをひしひしと感じずにはいられない老女の悲哀を主題としています。

この「娘捨」の終末の部分に「返せや返せ、昔の秋を、思い出たる、妄執の心、やる方もなき、今宵の秋風、身にしみじみと、恋しきは昔、偲はしきは閑浮の、秋友よと思ひ居れば……」というところがあります。ここは、地謡と囃子によって、きわめてゆつくりしたテンポで語られるのですが、このかなり長い間、舞手は、ほとんど動きという動きはなく、ただ舞台の中央に立ちつくしています。

私は、橋岡先生の「娘捨」に接した時、この何もしないで立っているシテの姿が、さながら目に見えない光を放って、私の心に訴えかけて来たのを覚えています。曲と演者が渾然と一体化して、無限の空間の中心に力強く存在している。それは何ものか、永遠に続いて行くのか、今すぐに消え去ってしまうのか、全く不分明な時の流れの中で、ギリギリに自分の充実した瞬間を打ち出している以外の何ものでもないのです。

世阿弥の著書の一つ「花鏡」の中に「万能結」「心事」という一段があつて、

見所の批判に云、「せぬ所が面白き」など云事あり。是は、為手の秘する所の安心なり。まづ、二曲を初めとして、立はたらき・物まねの色々、ことごとくみな身になす態也。せぬ所と申は、その隙なり。このせぬ隙はなにとて面白きぞと見る所、是は、油断なく心をつなぐ性根也。舞を舞い止む隙、音曲を謡ひ止む所、その外、言葉・物まね、あらゆる品々の隙々に、心を捨てずして、用心を持つ内心也。此内心の感、外に匂ひて面白きなり。

かやうなれども、此内心ありと、よそに見えては悪かるべし。もし見えば、それは態になるべし。せぬにてはあるべからず。無心の位にて、我心をわれにも隠す安心にて、せぬ隙の前後を縫ぐべし。是則、万能を一心にて結ぐ感力也。

と書かれています。つまりセリフをいったり、歌ったり、芝居をしたり、舞ったりしている、その合間合間に「せぬ所」があるわけで、世阿弥は、そうした「せぬ所」を心の働きのよって充実させて行くのだと説いています。

同じ「花鏡」の中に、心を充分に動かして、身体を七分の動きにせよ、と書いていますが、心を主体とすることによって、内容をより豊かにし、演技に内面的なひろがりを持たせることを重視しているのです。

そして次に「此内心ありと、よそに見えては悪かるべし」とありますから、そうした心の働きの観客にさとられてしまつてはいけな、なぜならば、それはもはや「わざ」つまり技巧に墮してしまふからだ、とあります。

しかもまだそれだけでも満足には至らない、「我心をわれにも隠す安心」というのですから、自分自身でさえ、感じられない状態にならなくてはいけない、つまり演技しているという意識から離れてしまわなければ本当でないといっています。

(観世寿夫『心より心に伝ふる花』によ)

【問題二】

上の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

〔注〕

見所：見物人。観客。

問一 傍線「かやうなれども、…感力也。」の部分について、次の条件を踏まえた上で、現代語に訳しなさい。

条件① 逐語訳である必要はなく、適宜、語を補うこと。

条件② 「かやう」の指し示す内容を明らかにすること。

条件③ 筆者による解説等を踏まえること。

問二 最終段落の筆者の意見を踏まえながら、国語科の学習に関してのあなたの考えを述べなさい。

「小論文」国語国文学科

受験番号					
氏名					

採点欄

No. /

【問題一】

問一

問二

裏面使用可

ここから記入すること ←

ここから左には記入しないこと

受験番号					
氏名					

「小論文」国語国文学科

採点欄

No.

【問題一】

問一

問二

裏面使用可

ここから記入すること
←

ここから左には記入しないこと